
僕らは青春妄想族

花想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは青春妄想族

【Nコード】

N1807A

【作者名】

花想

【あらすじ】

青春とはなんとも素晴らしい響き。ここに青春真っ盛りの三人の男子高校生の日常がある。ハイテンションでバカ丸出しのキティ。クールで冷静なあいちちゃん。優しくて可愛いボイラ。三人の高校生活をここに綴る。

第1話 暑さ寒さも彼岸まで

「うあゝ…あつち…」

うだるような暑さのこもる体育館で高橋俊也（通称：キティ）は右手でパタパタと顔をあおぐ。視線の先にはテカテカと光る校長の頭。今日は全校朝礼なのだ。

「なあなあ！！あいちゃん！！あのハゲなんとかならんのか？！」

あいちゃんと呼ばれた男子生徒（本名：加勢愛斗）は、ダルそうに振り向いた。

「…話しかけんな。暑い。」

あいちゃんはそれだけ言うと、またダルそうに前を向く。キティは唇を尖らせて今度は後ろの男子生徒に声をかける。

「おい、ボイラ！！なんか少しでも涼しくなれる方法は無いんか？

！」

ボイラ（本名：三浦大和）は困った顔をして言った。

「えっと…少しでも風の通りがよくなれば涼しくなるかもね。」

この言葉に納得したキティは前を向いた。少しでも風が通ればいい…その言葉を頭の中で反芻していたキティには、ある名案が浮かんだ。

風が通らないのならば風を起こせばいいのだ

キティはおもむろにフウフウと息を吹き出した。熱いものを冷ますように思い切り息を吹く。キティは息を吹くことで風を起こそうとしたのだ。

「生暖かくてキモイ。」

あいちゃんが振り向いてキティの頬をつかんだ。

「ら…らんらよ（な…なんだよ）」

キティは思い切り頬を両手で挟まれて息を吹けなくなった。

「お前の息が首にかかる。キモイし暑いしウザイ。上向いてやれ。」

あいちゃんは手を離すと不機嫌な顔で前を向いた。

それから30分間。キティは上を向いて息を吹きつづけた。あまりにも力いっぱい吹きつづけたので朝礼が終わる頃にはキティは酸欠状態に陥っていた。

「では各自、自教室に戻って10分後には……………」

キティはそこまで聞くと倒れてしまった。グラリと世界が回る。体に力が入らない。

「ふううううう……………」

奇妙な溜息と共にキティの体は体育館の床に貼りついた。

「ちよつ…キティ?!大丈夫?!」

後ろにいたボイラが慌ててキティの頭を起こした。あいちゃんも呆れたという顔でキティを見ている。そんな二人をばやけた視界でとらえたキティがニツコリ笑いながら言った。

「おい…床って冷たくて気持ちいいんだぞ……………」

キティは意識を失った。

「…キティ…起きろ…」

目を開けると、そこには心配そうなボイラと冷めた目つきのあいちゃんがいた。

キティはいつの間にか保健室のベッドに寝かされていた。

「ちよつ…なんで俺はこんな快適な場所におるんじゃ!」

何が起こったのか全くわかっていないキティは勢い良く起き上がる。

「キティは倒れたんだよ」

ボイラは安心したように可愛らしく笑う。

「そ…そうなのか…。俺は…みんなに風を起こす為に我が身を削ったんだ…」

キティの頭に激しいツツコミが入った。

「バカ。お前の息で風なんか起こるか。」

あいちゃんがクールに言い放つ。

「なんだよう!!誰のおかげで今こんなに冷房がきいた部屋に存在できると思つとるんじゃ!!」

自慢気に言い放つキティは、すっかり健康体に戻っていた。

そうして暑い教室に戻ったキティは蒸し風呂のような苦しさを感じながら、ある決意を固めていた。

「これからは朝礼で倒れることにする」

快適さを得る為なら自分の身を粉にして動く。嗚呼、青春時代真っ盛り!!!!!!!!!!!!!!

第1話 暑さ寒さも彼岸まで（後書き）

はい！！初めまして！！花音と書いて「カノン」と読みます。いきなりおバカでスイマセン。。夏なので読んで楽しくぶっ飛んだ小説を書きたいと思いました。これからもぶっ飛んで書いていきますので、よろしくお願いします。

第2話 俺の周りはバカばかり（前書き）

とある日曜日、あいちゃんの休息の邪魔をするものがありました。
ありがた迷惑な訪問者は・・・

第2話 俺の周りはバカばかり

ピリリリリリリ……

今日は日曜日。学校が休みで何も予定がない日曜は夕方まで寝る。

あいちゃんは寝るのが好きだ。目を開けているとダルイ。ハイテンションでバカなキティとも今日は関わらないで済む……と思っていたのに。

ピリリリリリリ……

さつきから鳴りつづけている携帯電話。画面上にはハッキリ「キティ」の文字。

「……電話に出んわ……」

くだらないギャグを呟きながら、あいちゃんは自分の枕の下に携帯電話をしまいこんだ。つまり拒否だ。せつかくの休日をバカに台無しにされてはたまらない。

しかし、いつこうに鳴り止まない。あいちゃんはモソモソと携帯電話を取り出すと電話に出た。

「………はい」

あいちゃんが言うと受話器からは甲高い裏声が聞こえた。

「もしもし?? あたしキティちゃん。今、あなたの家のドアの前にいるの。」

悪夢だ。あいちゃんは黙って電話を切った。だからバカは困る。いきなり家に来るのだから。

ピンポン チャイムが鳴る。それと同時に姉の玄関に向かう足音。「はぁーい!! あら俊也君と大和君じゃん。愛斗の部屋わかるよね!! どうぞ!!」

姉は愛想良く二人を家に上げた。これだからイヤだ。あいちゃんの姉（唯子）はすごく美人だ。色んな人から羨ましがられる。しかし、弟の目から見れば美人だがキティ並みのバカだった。あいちゃんが寝ていることなど微塵も頭には無いだろう。

「はよっす！！俺からの電話を無視しようとするとは…無駄な抵抗だな！！」

勢い良く俺の部屋のドアを開けたキティは信じられないテンションだった。コイツの脳みそはゼリ・できているに違いない。大和はニコニコと楽しそうに微笑んでいる。コイツの脳みそは花畑だ。

「…で、何か用件があるんだろうな？？」

用件がなければぶっ飛ばす。いや、あってもぶっ飛ばすのだが…。

「そりゃそうだろうよ相棒！！」

相棒ではない、というツツコミはめんどくさいので黙って目をそらした。

大和を見ると、すっかりくつろいでいて、寝転んでマンガを読んでいた。

「大和：お前協調性無さすぎ…」

俺が言つと大和は一言

「一応話は聞いているからイイだろお。」

と言った。いや、良くないと思う…がめんどくさいので放っておいた。

「なんだよ二人とも！！俺がせっかく良いこと考えたのにさあ！！」
キティの思いつくことに良いことなんてあるはずがない。

「名づけて！！ 出会い系 with アバンチュール in summer だ！！！！！！」

嗚呼、またバカが始まった。題名で理解できる。出会い系で一夜のアバンチュールを過ごす計画だ。そんなことだろうと思った。

「俺は、この夏にチエリ・ボ・イを脱出する！！！！」

意気揚揚と片手を挙げたキティにボディプロ・が入った。しかも精神的に。

「俊也くん…まだチエリ・ボ・イだったんだ！！！！！！」

声の主は、あいちゃんの姉の唯子だ。唯子がクスリと笑ってジュ・ストケ・キを置いて部屋から出るまで、キティは固まったままだった。それを見たあいちゃんは

「バカを静めるのに一番効くのはバカだ」
と悟ったのだった。

嗚呼これだから青春ってやつはさあ………!!

第2話 俺の周りはバカばかり（後書き）

はい！！！！すいません！！！！話で作者もバカだつて丸出し。。だつて自分のHN間違つてんだもんよ。本当にバカでごめんなさい。。花想でカノンです。どうぞ改めてよろしくお願いします。はい…。

第3話 神様、俺に行動力を（前書き）

ボイラは実は天然キャラだったらしい・・・

第3話 神様、俺に行動力を

「じゃ…じゃあキティの家行こうよ!!」

固まった後、落ち込んでしまったキティをなんとか戻そうと俺は場所を変えるよう提案した。

「そうだな。ボイラの言う通りだ。俺の部屋は狭いし。」

あいちゃんも慌てて同意する。

「あゝ…今日はオイラの兄貴と姉貴がご在宅だぞ?!それでもかわんのか?!」

キティのテンションはまだ低い…と言っても普通の人なら十分高い状態なんだけど。俺達は頷いてあいちゃんの家を出ることにした。玄關の所でキティは唯子さんに「がんばってね!!」と言われていたが、面白いので見ていた。

そうして俺達はキティの家まで約10分の道のりを歩き始めた。

そう言えば、まだ誰も自己紹介してない…というか作者が「どうすれば良いかわからん」って嘆いてたから、ここでちよっくら自己紹介etc…

キティ (本名：高橋俊也) ハイテンションの申し子 のつぱ

童貞 オシャレメガネ愛好家

あいちゃん (本名：加勢愛斗) 男前 めんどくさがりや 喫煙

愛好家 クール 彼女有

ボイラ (本名：三浦大和) 童顔 チビッコ マイペース 家は自営業

こんな感じです。そうこう言ってるうちにキティの家に着いた。

「相変わらずデツケエなあ…」

あいちゃんが珍しくアホ顔で言った。キティの家は金持ちだ。家は豪邸つつつか城だ。貴族の城みたいな家に住んでいる。きつと並外れた金持ちだからこそ、こんな性格に育ったんだろ。可哀相に…

・(鼻笑)

「さあ入りたまえ!!」

キティがドア（ライオン付き）を開けるとそこには……山のようにキティちゃんがいた。

キティのお姉さまはキティちゃんマニアだ。そして並外れたヤンキ-でもある。

これがキティのあだ名の由来だ。

「数が多すぎて姉貴の部屋だけでは納まらなくなったのだ!!」

何故かキティは家に帰ると堂々としている。お坊ちゃまだから家では偉そうなのかもしれない。壁一面にはたくさんのキティちゃん。しかも等身大のばかり。ぶっちゃけ怖い。ものすごく見られている気がする。なんで体重がリング三個分のキティちゃんがこんなにデカイのだろう。

「俺の部屋に直行コースと森のくまさんコースとカモメの水兵さんコースどれがいい??」

意味不明だ。全くもってわからん。

「直行コースで!!」

基本的に金持ちの考えは恐ろしいのでおとなしく（むしろ普通）直行コースにした。

そうして俺達は「直行コース」（手書き）と張り紙のあるエレベータ-に乗り込んだ。

「……お前ハナワくんだな……」

エレベータ-に乗るといきなりあいちゃんが呟いた。

ボケたのか?!感想か?!これはツツコムべきなのか?!キティがハナワくん……じゃあいちゃんは男前の大野くんあたりか……ってか俺は何だ?!ハマジ……いや藤木くん……むしろブ-太郎かブウ?!

俺の心の葛藤をよそにエレベータ-は3階（キティの部屋）に到着した。

二人は平然とキティの部屋に向かう。俺はというと

「くそっ……ずばりそうでしょう!!!」ってツツコムべきだっ

た・・・」

と後悔の嵐の荒波に揉まれながら

・これからは当たって碎ける精神でツッコミを・
そっ心に誓ったのだった。

第3話 神様、俺に行動力を（後書き）

はい！！なんか進行遅くてすみません。。これでも精一杯生きてます（焦）宜しければ感想やご意見下さい。。日々精進いたしますので・・・お願いします。。

第4話 俺はRPGでは剣士だ（前書き）

キティの家にはどうやらラスボスがいるらしい・・・心して読まれよ！！

第4話 俺はRPGでは剣士だ

「オラ、入った入ったあ!!」

一人でブツブツ言っているボイラを横目に（愛するが故の放置プレイ）キティは自分の部屋に入った。キティの部屋は広い。なんとつて3階全てがキティの部屋なのだから。

「キティさあ・・・こんな広い部屋で寂しくないの??」

ボイラがウルウルした瞳を向ける。

「なんつも!!むしろ王様気分だぜ!!つかなんでボイラそんな捨てられた子犬みたいな目でオイラを見つめるんじゃ!!」

キティが言つと、あいちゃんとボイラは一瞬キョトンとして見つめ合った。

「なんだよ。可愛いじゃねえか。」

あいちゃんの一言にボイラはうつむき加減に赤面する。

きしよい。いやマジで。こいつらいつからハードゲイになったんだ・・・。

キティは抑えられない寒イボと悪寒に肩をすくめつつソファにVIP座り（三人掛けを一人で使う）して携帯電話をひらいて規模の大きい有名出会い系サイトをひらいた。

「よっしゃ!!気合入れるぜ野郎共!!」

あいちゃんとボイラにも強制的に同じサイトをひらかせた。

「俺はこの夏こそ童貞を卒業する!!!!お前らも俺に協力してくれ!!」

キティは戦隊ヒーローの赤レンジャ（基本的にリーダー）並に爽やかな笑顔を演出した。

「ムリ。」

あいちゃん即答。

「即答すんなよ!!仲間だろ??緑レンジャー!!」

あいちゃんシカト。

「お前は大親友だよな??ピンクレンジャ-!!」

ボイラ笑顔で頷く。ピンクレンジャ-に不服は無いらしい。

「せっかくだから協力してあげようよ!!ね??(ウルウル)」

ボイラの可愛い説得(色仕掛け)により、あいちゃんはものすごく嫌々協力することになった。

「じゃあまずイイナって思う子にかたつぱしからメール送ろうぜ!!
!選考基準は君達に任せる!」

キティはそれだけ言うとかチャカチャと携帯電話のボタンを押し始めた。

一時間後・・・黙々と携帯電話操作を続けるキティをよそに、二人は飽きていた。

「なんだよ!!お前達正義の心を裏切るんか!!」

あいちゃんシカト。ボイラは半寝。キティ必死。

「あいちゃん!!オイラにも愛を持って接してクレヨン!!」

キティの攻撃!!あいちゃんは全くダメ-ジを受けていない。ボイラは眠っている。

「ムリ。俺の愛は全てアントニオ猪木に捧げた」

あいちゃんからの攻撃!!あっけなくキティ死亡。ゲームオーバー!!

オラ死んじまうかと思ったぞお(声:悟空)

携帯電話が鳴った。しかもドラゴンボール仕立て。ボイラの携帯だ。

「あ・・・メールきたみたい!!」

どうやら出会い系の女の子から返信が返ってきたらしい。

「沖縄の同い年の子からだあ!!」

キティとあいちゃんがボイラの携帯を覗き込むと、そこには・・・

「ざわわ」

とだけ書かれていた。

「・・・ボイラ・・・一体何て送ったんだ??」

さずがのあいちゃんもハテナ顔だ。

「え?!!・・・ざわわ・・・って送ったんだよ!!」

笑顔で答えるボイラをキティは抱きしめたくなった……が、気持ち悪いのでやめた。

チャ・チャ・チャ・チャ・（猪木のテーマ）

携帯電話が鳴った。今度はあいちゃんだ。

「何て??」

あいちゃんなら普通にメルを送ったはずだ!!

「いや、よろしくってさ!!」

あいちゃんが画面を見えるようにキティに向ける。

そこには「36歳の主婦ですが、どうぞヨロシクね!!」の文字。

「……つてオイ!!あいちゃん熟女がお好みだったのかよ!!」

思わずキティがつっこむ。

「俺の勝手だろうが!!」

あいちゃんはそっけなく答えるとメルを返信し始めた。ボイラは相変わらず「ざわわ」と送り続けているし、あいちゃんは主婦とメルをし始めてしまったし、キティは暇になった。

チャララ・チャラララララ・チャララ・（必殺仕置き人）

キティの携帯電話が鳴る。キティは固まった。この曲は……

……

「もっ……もしも……」

メルでは無く電話だった。そして……

「いや……俺じゃないってばさ!!いや……ちよっ……姉ちゃん待ってくれよ!!」

相手はキティの姉（理沙）だった。

「姉ちゃんのプリンとか知らんてマジで!!」

キティが慌てている間にエレベータの到着音がした。エレベータの中から

「血祭りじゃオラアアア!!!!!!」

と叫ぶ女（姉）の声。そして

「おっ……俺は食べてないって言うてんだろお……ギ
ヤアアア!!!!!!」

と悲鳴をあげる男（兄：竜也）の声。

硬直してエレベーターを一心に見つめる三人。

キティはこれから降りかかるラスボス（最強）からの愛の鉄拳を想像して身震いをする。

そして思った。

・これからは出会い系なんて騒ぐ前に冷蔵庫の姉の好物のプリンの有無を確認しよう・

楽しい青春のためには細やかな気遣いが必要なのだった。

第4話 俺はRPGでは剣士だ（後書き）

はい！！読んで下さってありがとうございます！！キティの家はとってもスリリングで書くのが楽しいです。そんなこんなで突っ走ってます作者ですが、ご意見やご感想くださったらすごくうれしいです！！何でもかまいませんのでよろしくお願いします！！

第5話 よもやテロじゃん!! (前書き)

今回はキティ一家&あいちゃんとかいちゃん姉の団欒、そして家族愛(?!)を描きました。皆様も家族とのコミュニケーションを大切に

第5話 よもやテロじゃん!!

「はぁ………」

めちやくちやに荒らされた後のキティの部屋で俺達は溜息をつく。

「キティの姉ちゃん相変わらずだな……。」

俺の言葉にボイラも頷いた。

あの後……エレベーターから悲鳴が聞こえた後、キティはマツハの速さでベッドの下に隠れた。俺とボイラはただ顔を見合わせていた。エレベーターの扉が開く。二人が見たもの……それは恐ろしい形相をしたキティちゃんに顔がそっくりなキティ姉と某芸能人（G a t）くらい整った綺麗すぎる顔で血の海に溺れるキティ兄の姿だった。

（（鬼だ……））

ボイラとあいちゃんは硬直して、震え上がった。

「どこだ……オラア……隠れてんのはわかってんだよ……」

キティ姉はゆらりと揺れるとキティの部屋の家具を全てひっくり返しだした。「出てこねえと殺すぞ?！」

キティ姉はキティ兄の首根っこを掴んだままズルズルとひきずる。まるでホラ・映画のようだ。

「今出てきたら半殺しで済ませといてやんのによぉ!!」

「いやいやいや……だからって出てくるバカはいませんって!!」

「……は……はい……」

出てくるバカいたぁ!! ってゆうかええええ?! 出てくんのかよ!!
! なんで?! 半殺しだから?!

「あたしは約束は破んねえからよぉ!!」

それからのキティ姉のバイオレンスな行動は……言っまでもない。
ただ1つ言えることは、有言実行。約束どおりキティ姉は半殺しで止めた。っつか半殺しにした。

いやマジで。俺達は我が身かわいさに止めに入る勇気も出ない。

あまりにも怖すぎた。その瞬間……

「理沙ちゃん！！ママがプリン食べちゃったのお。でも新しいの買ってきたわよぉ！！」

内線からはキティ母の声（ものすごく美人）。犯人は兄でも弟でもなかったらしい。

一瞬考え込んだキティ姉はフンと鼻を鳴らしてキティを床に投げた。
「わかったか！！」

明らかに意味不明。間違っけていても謝る気配はない。なんて姉なんだ。恐ろしい……。

そして今ここには俺とボイラと重傷者（2人）が残された。

それからまもなくしてキティ兄とキティは手当てのために、かかりつけの病院に運ばれて行った。

大惨事を目の当たりにした俺達は疲れきって帰路についた。

俺にも姉はいるが……あんな事件にはならない。なぜならばバカだから。喧嘩してもすぐ忘れる。

「ただいま」

俺が帰宅するとピンクのエプロン姿の姉が出てきた。

「おかえりい 今日唯子特製のカレ - ON THE ライスよ」

ただのカレ - ライスだ。あきらかに。バカ丸出しだ。

俺はカレ - ができるのを待つ為にリビングのソファに座る。

「姉ちゃん、俺が姉ちゃんプリン食ったらキレル??」

俺が聞くと姉はしばらく考えて答えた。

「ん……焼きプリンなら怒る。めっちゃ嫌がらせする!!」

ん……バカだな。うん。知ってたけど。そんな具体的に言われても

俺、焼きプリン好きくねえし。

「じゃあ普段の生活でどんな時にキレンの??」

姉は首をかしげながら考え込む。我が姉ながら可愛らしい。いやシスコンじゃねえし!!

「太ってる友達に”アンタ痩せすぎ!!色気無いじゃん!!”って言われるの。お前みたいに巨乳だけど引ッ込んでる所が無い体のド

「コに色気あんだよバカ！！（キレ）って思うから（ニコッ）」
笑顔の奥の悪意が怖い。

「あと成績の悪い友達に”アンタなんで勉強しないのに点取れるの？！ずるいよね！！”って言われるの。お前とは出来が違うんだよボケが！！（キレ）って思うから（ニッコリ）」
姉ちゃん…いつもの姉ちゃんじゃない…。

「へえ……」

いつもニコニコとバカ丸出しのはずが（キレ）の部分は悪意に満ち満ちている。

「だからコッソリと嫌がらせすんの。太ってる子にはおやつん時にカロリーの高いやつ選んであげたりとか…成績悪い子にはわかってる問題をわかんないって言ったりとか」

ストレスたまってたんだな（汗）

俺は気付いた。バカはバカでも、ただのバカと悪意をもっているバカがいる。

ただのバカは能天気だが、悪意をもったバカは意外と危ない。
俺も知らないうちに復讐されているんだろう…。こっえ…。

嗚呼、神様どうか姉ちゃんがバカを脱出できますように。アメン。

第5話 よもやテロじゃん!!（後書き）

はい!! すいません。遅くなりました。そして読んで下さる方々、本当にありがとうございます。皆様のおかげで花想は動いておりますです。はい。今回なんだかグダグダになってますね。ものすごく自覚です。次回からは悔い改めハイテンションでいきますので、どうか見放さないでやって下さい。そして感想や評価など、どうぞよろしく願います。では、ハイテンションの修行にでも行ってまいります!!

第6話 秘めた恋心（前書き）

ボイラは秘密主義。実は熱い恋心を心に秘めておりました。その相手とは…

第6話 秘めた恋心

「ふう………」

朝からの溜息に妹が心配そうに俺を見る。

「ああ、ごめん。大丈夫だから」

俺はニツコリ笑うと学校へ行くために家を出た。

昨日の殺人未遂事件で疲れて帰宅後すぐに就寝したけど……キティ大丈夫かな？！

俺は心配していた。……が、3分後に俺は心配などいらなかったことを知る。

「ボオイラア！！オハイオオオオオ！！！！」

キティだ。間違いない。このハイテンションはキティ以外にあり得ない。

キティを見ると切り傷や痣はひどいものの、骨に異常をきたすことはなかったらしい。

しかも。痣は全部服で見えない所につけてあった。そこまで考えての殺人計画だったのか……。恐るべし、キティ姉。「お：おはよ……」

俺が挨拶を返すとキティは昨日のことなど何も無かったように輝く笑顔を見せた。

「ところでボイラ！！沖縄の子とはメールしてんのかい？？」

あ：そーいやあ返してなかったなあ……

「昨日返してないけど……今日返事するよ」

俺が言うときティはすねたように唇を尖らせた。

「いいよなあ……俺なんか誰からも返事こないままさあー」

キティ：半分死にかけたにも関わらず出会い系のことしか頭に無いのか……

「……キティあつぱれだね！！」

本心だ。まさに『あつぱれ』の一言だ。

「お前ならわかつてくれると思ってたゼエエー!!」
キティが抱きついてきた。

朝から男と抱擁を交わすなんて…暑苦しいキティの腕を引き離す。
「お前達…なんで朝っぱらからイチャついてんだよ。キシヨイぞ」
後ろからイケメン臭を振り撒きながら愛ちゃんが歩いてきた。

「何言つてんだよ!!愛ちゃんなんかハードゲイじゃろがいつ!!」
キティが拳手しながら叫ぶ。

思わず周囲の人達の視線が愛ちゃんに向く。

しかし愛ちゃんは焦ることなく微笑みながら言った。

「そう見えるか??」

…まいりました!!バツクに薔薇の花が見えた。

こんな綺麗な顔して微笑むのは反則だよ愛ちゃん…。

周囲の人達（老若男女問わず）は美惚れて溜め息を洩らす。

「そんな王子に乾杯!!」

キティも愛ちゃんのイケメンぶりに降参したらしい。

俺は愛ちゃんを見ているときめいてしまう。

いや…ハードゲイではなくて…。

愛ちゃんはお姉さん（唯子さん）と似ている。

一卵性双生児のようだ。

愛ちゃんを女の人の体にして髪を伸ばしたら唯子さんになる。

実は俺は唯子さんに恋こがれている。

読者の方々…まだ誰にも言っていないから、くれぐれも内密にお願いします。

染めてない薄い茶色の髪の毛に透き通るような白い肌。

いつ見ても自然体で柔らかな笑顔を浮かべている。

「たまらん…」

思わず心の中の言葉を口にしてしまった。

俺は慌てて周りを見回す…誰も聞いてなかったらしい。良かった…。

俺は愛ちゃんの横顔を眺めた（横目で）。やっぱ唯子さんとそっくりだなあ…。

「何?? 何かついてるか?? 目やにか?? まさか鼻毛?!!」

愛ちゃんは顔を隠した。

いや…別に良いんだけどさ…。

キティは愛ちゃんが顔を覆っている手を力ずくでひっぺがそうとしている。

たまらなくなつた俺は愛ちゃんに言った。

「愛ちゃん…お願いだからこれから鼻毛とか目やにとかウ コとか…そうゆう言葉使わないでね…」愛ちゃんはニツコリ笑って頷いた。やっぱ王子っスよ!! この人ヤバイっスよ!!

キティは怪訝そうな顔で俺と愛ちゃんを交互に見つめる。

そうして俺達は、また並んで歩きだした。俺は思った。

いくら好きな女の子でも、何でも許せるって思っても…聞きたくない言葉はある。男は女に夢を持っているのだから!!

どうか神さま。

唯子さんはそんなこと言えない人であるように…俺の気持ちが届けば最高です。アーメン!!

第6話 秘めた恋心（後書き）

はい！！遅くなりました（T T）花想でございます！！読んでくださってありがとうございます！！今回はボイラが実は愛ちゃんの姉を好きだったというのをばらしました（笑）これからもどうぞ読んでやって下さいませm（――）m

第7話 オイラとマドンナ (前書き)

夏の恋に憧れるキティ。そんなキティに恋のチャンスが訪れる!!
キティの運命はいかに!!

第7話 オイラとマドンナ

「キティおはよお」

学校に到着して教室の扉を開けようとした時、可愛らしい女の子の声がした。

思わず声のした方向を見ると同じクラスの竹中美代ちゃんだった。

「お…おはよ…」

美代ちゃんは一言で言うところ…小っちゃい！！いや俺がデカイのか？！そして良い匂いがして可愛らしくて頭が良くて…とりあえず学校のマドンナだ。

「…入らないの??」

俺は戸惑って硬直してしまっていた。はっず！！

「あ…いや、入るよ。うん。」

俺としたことが…突然の攻撃に不意をつかれてしまったぜ…。

「お前ら座れ！！」

俺が席に着くと同時に担任のアゴヒゲ男爵（命名：愛ちゃん）が怒鳴りながら入ってきた。

「今日の朝のHRは席替えをやるぞ！！」

アゴヒゲ男爵はうやうやしく朝の礼をすると、とんでもないことを言い出した。

なんですと?!?!今の俺の席は窓際の一番後ろ。一番最高の場所だ。そのおかげでやりたい放題なのに…席替えなんかしたらどうなるかわからんじゃないか!!!!!!

ボイラの席は真中の三番目。つまり真中の真中。愛ちゃんの席は廊下側の一番後ろ。

俺が二人を見ると二人も俺を見る。

俺は即座に二人の顔から心中を読み取った。

むくん…ボイラは…「俺今日の占い2位だったから後ろいけるカモ」
「てなとこか。」

愛ちゃんは…「ど でもいいけど動くのめんどくせ」って思ってる。

はあ…嫌だぜマジで…。

どんなに心で拒否していても、くじ引きの順番は回ってくる。

「おいメガネ！…ちゃっちゃと引けよ。」

俺の目の前にはくじ箱を持った…阿南恵理（ブタゴリラ 命名：愛ちゃん）が立っている。

なんでコイツがわざわざ回ってくんだよ！！俺はブタゴリラと目を合わせないように手の感触だけでくじを引いた。

「3番…」

俺は席の番号が書かれている場所を見る。

「ふっ…一番前じゃん！！」

まだいたのかよブタゴリラ！！！！自分の星に帰れよ！！！！

慌てて前の席を見る。真中の一番前…。ってオイ！！ぜって ブタゴリラが仕組んだんだ！！陰謀だ！！

ふとボイラを見るとボイラはニコニコしていた。目が合うとピ・スサインをしながら

「俺、今のキティの席だよ」

と口パクで言いやがった。この横取りやろうが！！

「むしろお前の陰謀だな？！お前がブタゴリラをよこしたんだろ？」

俺が立ち上がって言うのとブタゴリラがコツチを見た。目をそらして大人しくしておくことにした。

今度は愛ちゃんの方を見る。愛ちゃんは黒板をしばらく見て…寝た。いやいやいや！！寝るのかよ！！今から引越したっつの！！

俺は消しゴムを投げて愛ちゃんを起こす。愛ちゃんは既に熟睡状態だった（のびた級）らしく、ものすごく不機嫌そうにこつちを見た。

「どこになったんだよ？？」

俺が聞くと愛ちゃんは自分の席を指差して、また寝た。

「同じなのかよ？！どんだけくじ運イイんだオイ！！」

俺はつつこむ…が！！愛ちゃんは気持ち良く夢の世界に旅立った。

「じゃあ一時間目までに席替え済ませとけよ　！！」

ひげ男爵は日誌と出席簿を持って、さつさと教室から出て行った。
最悪だ。俺は頬を膨らませて自分の席に移動した。

その瞬間……正しく（?!）生きてきた俺に神からの贈り物があったことを知る。

「キティの横だあ！！よろしくネッ」

俺の隣の席は…美代ちゃんだった。

ひゃあああぁっほう！！今ならドコまででも飛んで行けるぜ畜生！！！！

俺は理解してしまった。神サマの意思を。

俺と美代ちゃんは結ばれる運命なんだ

輝く笑顔を振り撒きながら俺が後ろを向くと、ボイラの隣　ブタゴ
リラで、愛ちゃんの隣　愛ちゃんの彼女だった。

俺はなんて運の良い青年なんだ！！！！

俺は決めた！！この夏は美代ちゃんとの恋に溺れる！！！！

神様、俺と美代ちゃんの未来に幸あれ！！！！！！

第7話 オイラとマドンナ (後書き)

はい！！花想です！！今回はキティの恋が始動です！！しかも意中の相手はマドンナです！！これからの展開は予想外になるかもしれません！！楽しみにしてください！！メッセ-ジをくれて元気を下さった皆様！！ありがとうございます！！頑張りますのでよろしく願います！！

第8話 俺と彼女の生活（前書き）

今回は愛ちゃんの真面目な恋愛模様です。

第8話 俺と彼女の生活

あ……最悪だ。本当についてない。なんで俺の隣が華恵なんだ。朝のHRは席替えだった。俺は運が良かったのか今と同じ席になった。

そこまでは良かったんだ。隣の席なんて誰でも良かったんだよ。華恵以外なら！！！！

「なんで隣に来てんだよ！！」

俺が言くと華恵は鼻で笑った。

「知らんわ。つか嫌ならアンタ目悪いとか言ってキティと変われば??」

つく……相変わらず憎らしい女だ。華恵は俺の彼女だ。一応付き合っている。

中学から付き合いだして、もう4年になる。昔は女の子だったのに……。

「お前本当に可愛くない女だな。昔は中身だけは可愛かったのに。」
華恵が睨みをきかして俺を見た。

「アンタは昔から全く可愛くなかったもんね！！」

顔が怖いので反対方向を向いて寝ることにした。

ああ……どうしていつもこうなんだろう。いつもいつもこうやって喧嘩になるんだ。

好きなのに。好きじゃなかったら4年も付き合っていないか。

二人の時はそれなりに素直になれるもんだけどなあ……。

「……で、あんた今日は家来るわけ??」

授業中に華恵はボソツと呟く。

「……ああ。」

俺も呟く。二人だけの会話。今だけは二人だけの世界。何故か懐かしい気持ちになる。

付き合い始めた頃の甘酸っぱくて息苦しい感覚。

「愛ちゃあん！！帰ろうぜエエエイ！！」

放課後、キティはハイテンションにカバンを俺に渡す。ボイラもニコしながらカバンを持った。

俺はカバンをキティに返す。

「今日はちよつと……」

俺が言っているとキティは頬をパンパンに膨らませた。

「なんだよお！！イチャつきデイクだよ！！今晚は熱帯夜ですわネ！！」

キティはセクシ・ポーズをする。こいつ……殺す。

「華恵ちゃんとラブラブだねえ」

ボイラはフニツとした笑顔を浮かべた。こいつ……可愛いな。

「あ……んじゃな」

キティを撲殺するのは時間は短く終わるが労力がある。

めんどくさいので、俺はカバンを持って先に帰宅している華恵の家へ向かった。

「入れば??」

もう通り慣れたマンションの一室。ここで華恵は一人暮らしをしている。

チャイムを鳴らすと中から華恵の声がした。

「ノド渴いた。ジュース。」

俺はいつもの俺の場所に座る。

「自分で取れよ。ウザいな。」

そう言いながら華恵は台所に向かう。まるで夫婦だな。

華恵が取ってきたコ・ラを一気に流し込む。炭酸のきつさに思わずむせた。

「バカ！！ハゲ！！コ・ラこぼすな！！！！」

華恵が慌てて布巾を取ってきた。

俺はコ・ラまみれになった服を拭いている華恵を見る。

印象的な大きな目は黒くて長い睫に覆い被さる。こんな睫で重くないのだろうか。いつも思う。

形の良い唇は薄く笑みを浮かべている。

「あんた本当にドジだよー！」

…久しぶりにちゃんと見た。華恵の笑顔だ。無邪気な…まるで子供のよような笑み。

「…お前…実は可愛かったんだな。」

俺が言っていると華恵は赤面して俯いた。

「バツカー！今更気付いたのかよー！おっせえよー！」

そう言いながら顔を隠す華恵を抱き寄せる。

華恵は黙って俺の胸に寄り添った。

今わかった。きっと俺達はいつまでもこうしているんだろう。

夫婦みたいでもいいじゃないか。こんな時間がある夫婦なんて素敵だと思うから。

第8話 俺と彼女の生活（後書き）

はい！！遅くなりました！！しかもコメディらしくない（T T）
すいませんでした…。またハイテンションに攻めていきたいと思っ
ますので…よろしくお願いします！！！！！！

第9話 恋のから騒ぎ（前書き）

おまたせいたしました!!

第9話 恋のから騒ぎ

「はあ……」

俺は一人で家に向かって歩いてる。何故なら、キティと途中まで一緒だったのにキティがマドンナの姿を見つけて追いかけて行ったからだ。

偶然を装って一緒に帰るつもりらしい。家は反対方向のくせに。愛ちゃんはデートだし……なんかみんな青春してるよなあ。

「俺だってアピールしたいのに……」

俺は足を止めた。視線の先には唯子さん。学校帰りらしく制服姿に買い物袋をさげてる。激しく萌え……！！写真に残したい程だ。

「あれ……ボイラっち……今日は一人なの……」

唯子さんは俺の姿を見ると小走りで近寄って来た。

「あ……はい……。唯子さんは……買い物ですか……」

「うん……今日はビーフストロガノフってタイトルのハンバーグなの……」

ビーフストロガノフとハンバーグは違う物だとわかってはいても、あまりの可愛さに赤面してしまう。

「良かったらうちで食べて行かない……？家に一人ぼっちで寂しいの……」

「あ……やばい。嬉しすぎる……！！」

「よっ……喜んでー」

って何居酒屋の返事みたいな事言ってるんだ俺……！！

俺の戸惑いをよそに唯子さんは笑顔で家に入って行った。

俺も後ろをついて行く。

唯子さんは薔薇の香りを振り撒きながら鼻唄まじりに買い物袋をテーブルに置いた。

前から思ってたけど……何故にこの姉弟は薔薇の香りがするのだろう。やっぱ美形だからか……？

「あの…前から思ってたんですけど…」

この際だから聞いてみようと思った俺は唯子さんを見る。

「ん??」

唯子さんは首をかしげた。

……………死。マジで。

「いや…あの…薔薇の…その…」

一瞬意識が飛んだ俺は慌てて言葉を探す。シリメツレツ。

「あ…わかった??」

唯子さんは少し照れたように笑った。

「ローズオイル飲んでるの。私ね薔薇が大好きだから前から飲んでいるんだ!!」

ローズオイル…初めて聞いた。薔薇の油…飲めんのか…油。

「あ…薔薇嫌い??」

唯子さんは心配そうに覗きこむ。

「あ!!いや全く!!たまりません!!」

…ってなんでやねん!!たまりませんって…俺何言ってたんだ!!どうしてこうなんだ!!みんなオラに力をくれっ!!(悟空風)

「ふふっ…ありがとう!!」

もう俺死んでもいい。唯子さんの笑顔を俺一人だけが見られるなんて…。

唯子さんはニツコリ笑ってハンバーグを作り出す。

俺も慌てて手伝った。こう見えても料理は得意なんだ!!

「ボイラっちスゴイ!!」

さすがの唯子さんも俺の華麗な刃捌きに興味しんしんだ。

幸せ気分に浸っていると思わず指を切ってしまった。

「痛っ…」

血が出ると同時に唯子さんは俺の手をとった。

「大変っ!!」

そして血が出ている指を自分の口に持って行っった。

「えっ…」

俺が哑然としているうちに唯子さんは指を口に含む。

「ローズオイル消毒だね」

唯子さんはそれだけ言つと絆創膏を取りに走つて行つた。

えつと…俺の指が唯子さんの口に……うを……！！！！なんじゃあこりやあ……！！

顔がにやける。顔が熱い。とりあえず一生この指は誰にも触らせない。うん。

俺がボーツとしている内に唯子さんは絆創膏を持って来た。

そして…段差で転んだ。物凄く派手に。

「……………」

しばらく沈黙が続く。

俺は思わず唯子さんに駆け寄る。そして唯子さんはムクツと起き上がった。

「……………」

う???

「痛い……………」

唯子さんの目からは大粒の涙が溢れる。

「ただいま……………」

どうしたら良いかわからなくなっていると愛ちゃんが帰宅した。

愛ちゃんは俺と泣いている唯子さんを見比べて硬直した。

「ボイラ…唯子に何をした??」

愛ちゃんは真顔で聞く。

俺が無言で哑然としていると愛ちゃんは唯子さんの頭を撫でた。

「転んだのー」

唯子さんは子供のように愛ちゃんを見上げる。

愛ちゃんはフウと溜め息をつく俺の方に向き直した。

「悪いボイラ。こいつ泣きだしたら大変だから今日は…」

「あ！！大丈夫だよ！！俺帰るね！！」

俺は自分の荷物を持つと愛ちゃんの家を出た。

お大事に…という言葉を残して…。

星がキラキラ輝きながら俺を優しく照らす。

なんか…とりあえず…唯子さん可愛かったな…。

いつか…いつか俺が…俺だけが唯子さんの笑顔も涙も包み込める人間になりたい。そう切実に願う。

第9話 恋のから騒ぎ（後書き）

遅くなって本当にごめんなさい。。。 ”——（仕事に追われながらも続きます。どうかこれからも見捨てないで下さい） T T（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807a/>

僕らは青春妄想族

2010年10月8日23時50分発行